

越谷コミュニティセンター 開館十周年記念事業

越谷市民ギャラリー

越谷市郷土研究会出品紹介

出品期間 平成元年4月18日(火)～23日(日)

場 所 コミュニティセンター内 ポルティコホール

Ⅱ 伝承民俗行事

北川崎・坂巻家の御歩射について

石塚 吉男

北川崎根郷の坂巻（勇）家は、寛永年間（
一六四〇〜四三年）に、下総回葛飾郡大川戸
村（松林町大川戸）より、新武蔵新方庄川崎
村（越谷市北川崎）に移り住み屋敷神として
、天照皇太神を祀り今日に至る。
毎年正月七日（一月七日）に天香（大盤）
と稱えて、親族、姻族の戸主を招き御歩射（

備社）の儀式を行うて家例としている。

屋敷祠に山詣のもの、鏡餅、神酒を供えて

新禊祓の後、卯木（うづき）で作った弓矢、麻で縛つ

た弦、的は青竹の先をさくして和紙を貼り

、的印に鶴と亀を描き、これを先づ各家の戸

主が射的を行い参列者みなこれに倣う。的中

の率を以つて当年作の豊凶を占い、直会（ちかひ）は奥

座敷に於いていりり大盤振舞の宴会となる。

蓋し、祖先の地大川戸は、中古、大河上御

厨（厨西・足立の二郡を合む）として、伊勢

神宮の神領の本所であつたことが「吾妻鏡」の記録の中にしばしば見られる。

往時の「大河土御厨」の神事の遺風が、民俗行事として永く坂巻家に伝え続かれたものか。

現在本所であつた大川戸部落には皇太神宮（神明社）は存しているが、この神事は絶えて行われていない。

戦後、坂巻家のこの儀式は簡略化され僅かに往古の形式が窺われるのであつた。

註 歩射とは徒歩で行う弓射の儀、馬の

場合は流鏑馬という。

弓射の儀が失われた今は、佛社、毘社

の字をあててゐる。

大番とは上古は天皇、中古より將軍

の座所を警衛する任務に就くという。

伎師を早々と帰省して一族にその養ひ

を被與すること大番へ大盃を振舞とい

う。

2. 道しるべに描かれた馬頭観音像

この道しるべの正面には、線刻された蓮華台の上に馬の頭を頭上にかかげた三面六臂（三つの顔と六本の腕）の馬頭観音が陽刻されている。顔がのっぺらぼうのようになる程、表面がかなり磨滅しているが、中央の手は合掌し、上の左手は宝輪を、下の左手は宝棒を、上の右手は矛を、下の右手は斧をそれぞれ持っていると思われる。かつては馬頭観音像の前に籠を敷いて、毎年8月8日に地元の人々によって観音經（観世音菩薩普門品）が読まれたという。

馬頭観音は、江戸中期以降、馬を使用する人々によって信仰がさかんになり、馬の供養や馬の無病息災の祈願をこめて各地に馬頭観音の石塔が造立された。そして時代が下がるにつれて特定の死馬の供養のため、墓標としての石塔も出現してくる。

3. 道しるべの両脇の文面

向かって右脇の面に刻まれた文面によると、この世とあの世の二世の安楽のため武藏国と下総国の馬喰講中が共同して奉納したものとなる。当時は西方大聖寺（不動尊）の不動信仰は広範囲の地域をまきこんでさかんであったことを物語る。そして、各地からの参詣客で絶えなかったであろう。この石塔の願主は、石塚長利氏（相模町1-331-1）の先祖である石塚長治郎の名が刻まれている。石塚家はこのあたりの馬喰のかしらを代々務めた家柄で、代々「長治（次）郎」を名のったのである。現在でも名前に「長」を付けているのはそのためである。地元では、石塚家（「馬喰長」）を関東の馬喰の親方との言い伝えもある。馬喰とは馬や牛のことに詳しく、馬や牛の売買や仲介・貸し借りなどを業とした人で、農耕に使う牛馬を牧場などから農家に供給したのである。当時の馬喰たちは日頃の馬に対する感謝と、馬の供養や馬の無病息災、人々の旅の安全の祈願もかねてこの道しるべを造立したのであろう。なお、この面の左右には「草加越二里」（7.9km）、「越ヶ谷迄十二丁」（1.3km）と刻まれ、旅人や不動参詣者の道程のめやすとなったろう。

一方、向かって左脇の面には「是より左 不動尊道」と不動道の案内が刻まれている。また、「明和七 庚寅 十月吉日」（1770年）との紀年銘もあり、江戸中期、今から約220年前にこの道しるべが建てられたことがわかる。

4. 道しるべの上に載る不動明王像

馬頭観音を描いている道しるべの上に、この馬頭観音とは全く関係のない仏さまである不動明王像が異質の石材で作られて載せられている。馬頭観音（馬頭観世音菩薩）は菩薩の部類にはいり、不動明王より上の位である。この二つの仏像が上下に置かれていること自体不自然であり、更に同質の石材でない、不動明王像（紀年銘なし）の台座（磐石座）の幅が馬頭観音の石塔の幅より大きくてはみでていることなどから考えて、不動明王像は建立当初から載せたのではなく、後世の人が不動道の道しるべにちなんでも載せたのかもしれない。そして、この不動明王像を載せたおかげで、西方不動尊への道案内としてとてもめだつ目じるしとなったであろう。

この不動明王像は、岩の形をまわした磐石座の上に結跏趺坐（座禅の座り方）で

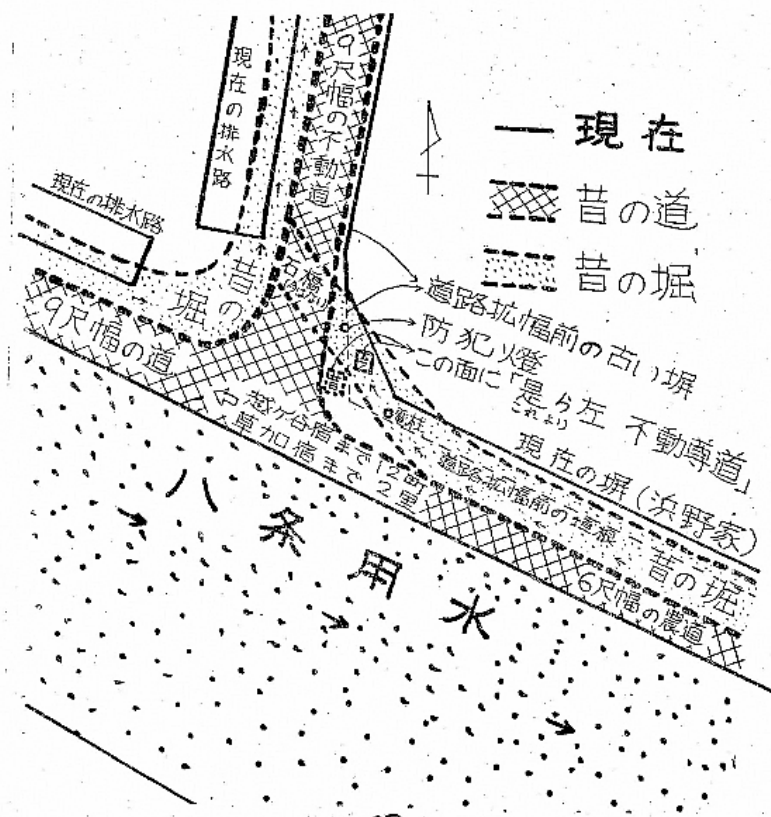
「ばとうかん」(屋号)脇の不動道の道しるべ

越谷市 平方 会野川 加藤 幸一

1. 「ばとうかん」と不動道の道しるべ

「馬頭観」(ばとうかん・ばとかん)とは、この道しるべが建てられているそばの決野家（相模町2-213）の屋号である。道しるべに馬頭観像が描かれているためいつの頃からかこう呼ばれた。「ばとうかん」宅の前にある八条用水に沿った道はかつて六尺幅の農道で、この農道の北側沿いは排水用の堀（落とし）があったが、昭和37・8年頃の土地改良の時に埋められる。次に決野家の道路敷地の採納により昭和47・8年頃に道路が拡幅された時、この道しるべは決野生男氏とその弟により斜め後方に移動された。そして今日に至っている。

下の地図は決野生男氏の協力によって当時の道しるべや道・堀の位置を描いたものである。道しるべは昔も今も西に向いている。



手に煩惱をしばる羅索を持ち、袈裟(大きな布を肩からはおって上半身に身につけたもの)は、両方の肩をおおい通す肩の着こなしをし、背にはあらゆる煩惱・障害を焼き尽くす大火炎を背負っている。この大火炎背は、不動明王の頭上あたりを縫って斜め横に割れたのを、接着面とともに穴をあけ、けやきの太い棒を両方の穴に入れて支え、セメントで再びつななおしているが(このことは、浜野生男氏が再補修した時にわかった)、その割れ目の跡が歴然とわかる。また、上部の一部が欠損しているのが残念である。

5. 不動道と門前町

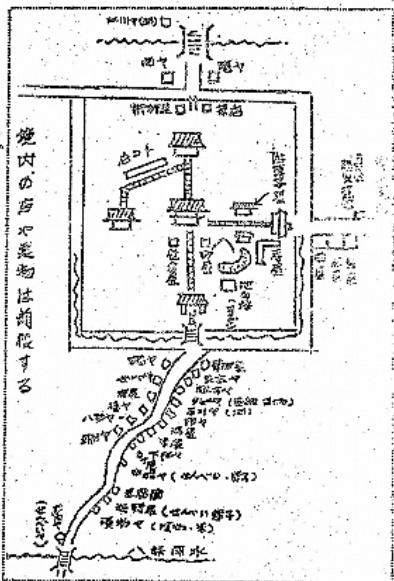
次にあげる3枚の不動尊の不動道と門前町の地図は、昭和35年発行の「越谷市の史蹟と伝説」のp143に載っている不動門前町の略図(高崎力氏作成・下図をもとに、昭和63年10月の野口茂太郎氏(相模町3-1、明治40年5月生まれ)への聞き取り調査を始めとして、浜野生男氏、野口正氏(相模町2-194)、田中亮氏の母堂(相模町6-457)、林正一氏(相模町5-251)らの協力を得て作成。不動尊に続く不動道の両側には商店が葉まり門前町ができあがっていた。大聖寺(不動尊)の寺領60石の地を耕作していた人たちを「門前百姓」と江戸時代呼んでいたが、彼らは主に、大聖寺の門前に屋敷を構えていたためこう呼ばれたのである。そして、明治・大正・昭和の頃まで不動参詣の客を相手に茶店・小料理屋・酒屋・駄菓子屋・湯屋・髪結・たび屋・車屋(人力車)など軒をつらね農業のあい間に商売をして大変にぎわっていたのであろう。昔の不動尊の門前町だった名残りが彷彿される。

門前町の様子については、「越谷市の史蹟と伝説」の中で、高崎力氏によって紹介されている。

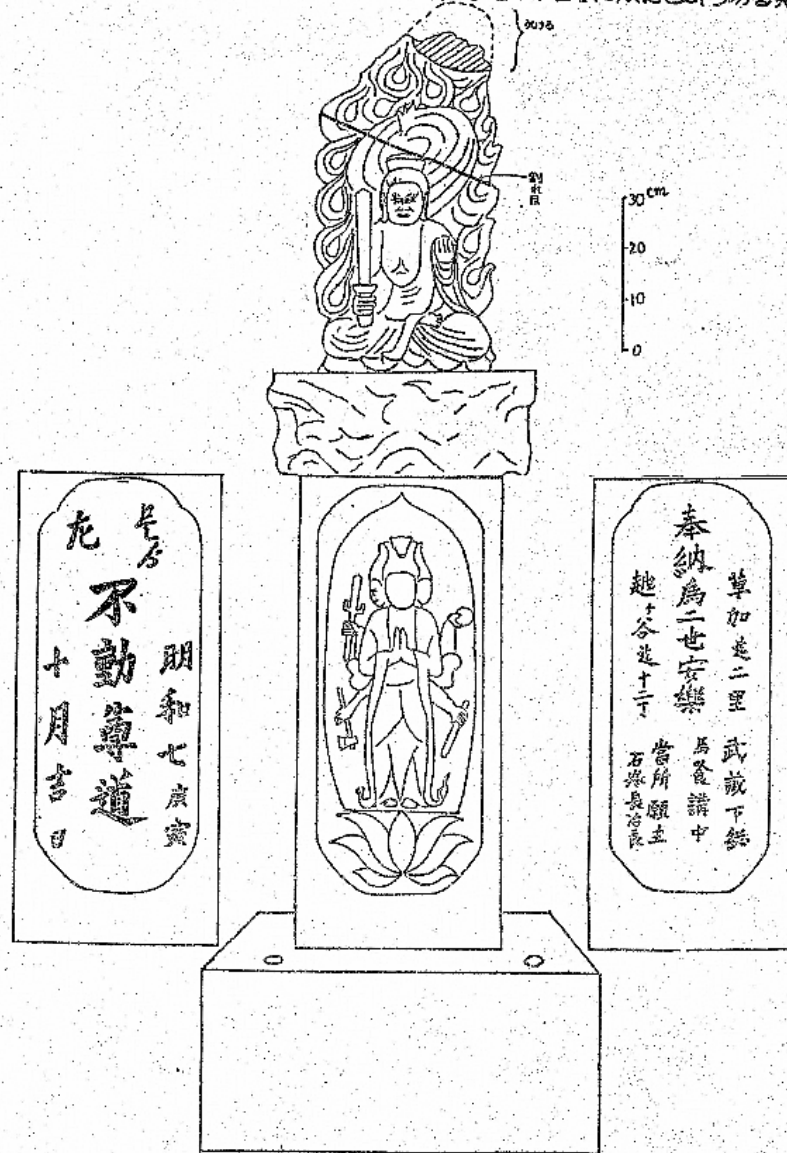
これによると、草加屋、末広屋、宿屋[?]、寿屋、朝日屋[旭屋]、山崎屋[湯屋]、新柳屋[新店]、植木屋、港屋等は料理店であり、常時三十人以上の女中[座敷女中]が働いていたそうである。そして、これらの女中さんの中の数人は近所に嫁つぎ、「史蹟と伝説」が出された当時は、子や孫に囲まれ、幸福な生活をしていたそうである。

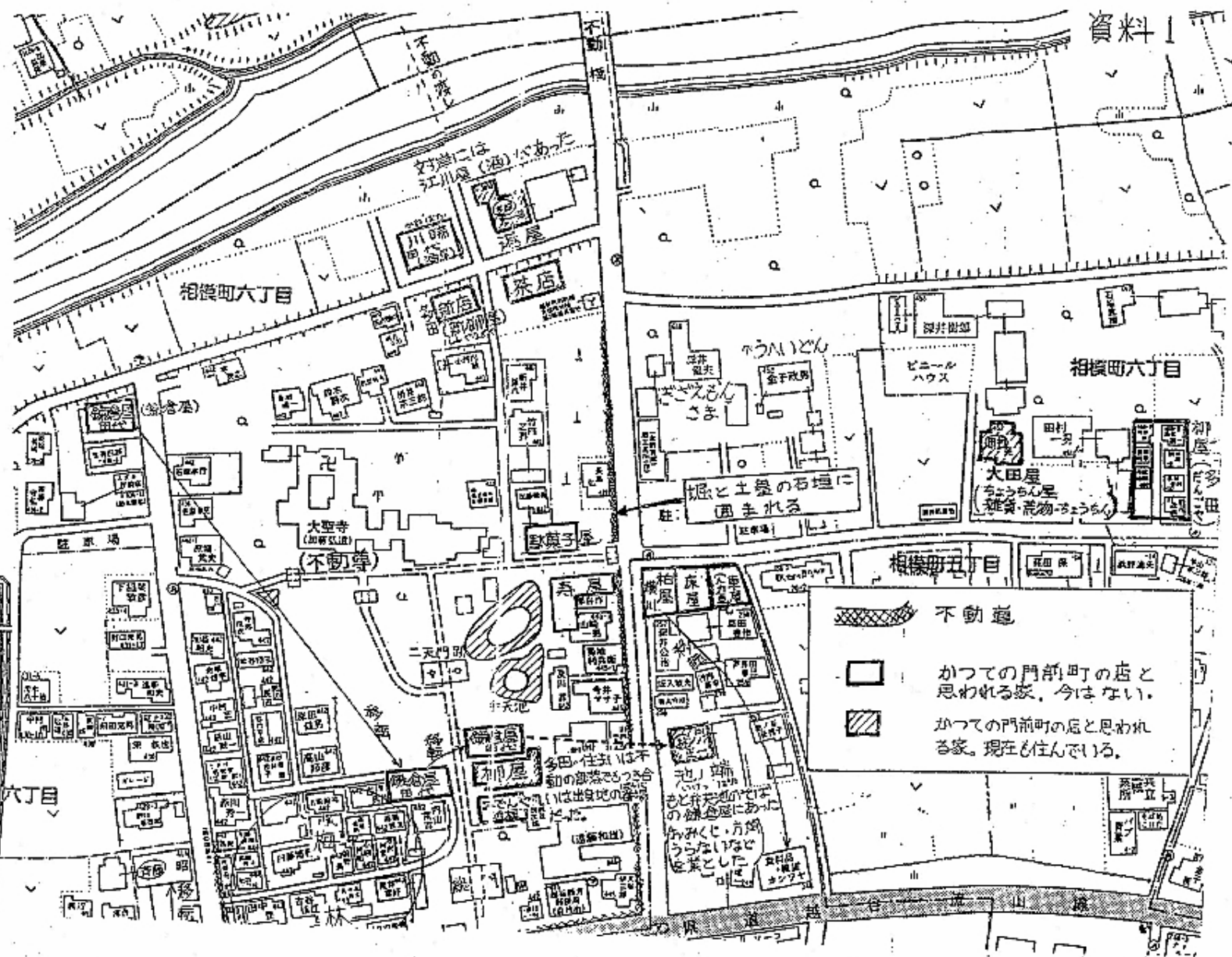
また、境内にはトコ店も置かれていたそうである。トコ店に関して、及び門前町の出火について、次のように書かれている。

トコ店とは人が住まない出店にて夜は臈灯を閉ざし昼は見ごんを上げてヒサシとした。日用、小間物装身、化粧等を売り、不動様へ

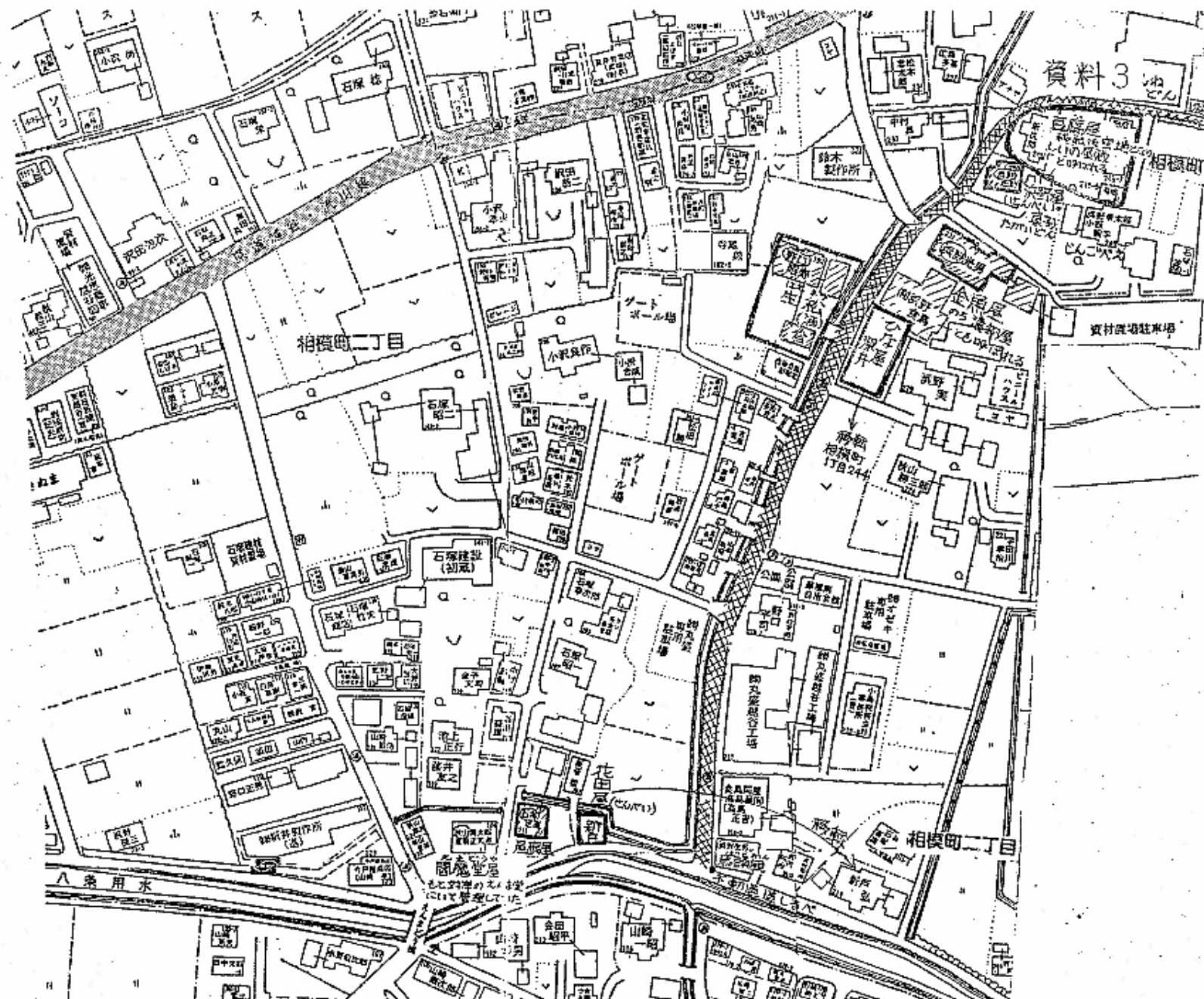


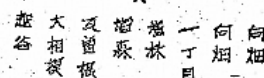
坐っている。髪(大きな布をスカートのように下半身に巻きつけて身につけたもの)の中から出た右足の足の裏がみられるのはそのためである。頭髪は莎髻と呼ぶ花形の髻を結び、目はつりあげて怒りの顔つきをし、右手に煩惱を断ち切る剣、左











さしも焚えた門前町も明治二十二年十月九日の山崎
湯屋からの出火で十七軒炎上したがその後復興し、昭
和四年 今度は〔斎藤〕せんべい屋からの出火で又も
七軒を焼き、その後だんだんと離散する者多く、今日
の如き衰微を来したたのであるが、今日でも〔9月4
日の〕大祭〔大会式・梨布〕には帰ってきて露店を出
す人もある。特に南の門前町は殆んど寺領地にして均
等割で貸していたもので収入がなくなると寺に行けば何とか食わせてもらえるとい
うことで、すべての経済は寺につながっていた。(以上、〔内〕は筆者が付け加えたもの)

4ヶ所をここに紹介する。次のページの明治初期の頃を表わした地図(陸軍測量局による明治十三年測量の縮尺二万分の一の速達図)の中に4ヶ所の位置を①～④で記入した。これらの他にも近郷にはたくさんの不動尊の道しるべが点在していたと思われるが、かつてはそこにあったのに今はないもの、壊れてしまったりして消失したもの、今でもあるものなど不動尊の道しるべに関する情報がありましたらご一報下さればありがたく存じます。

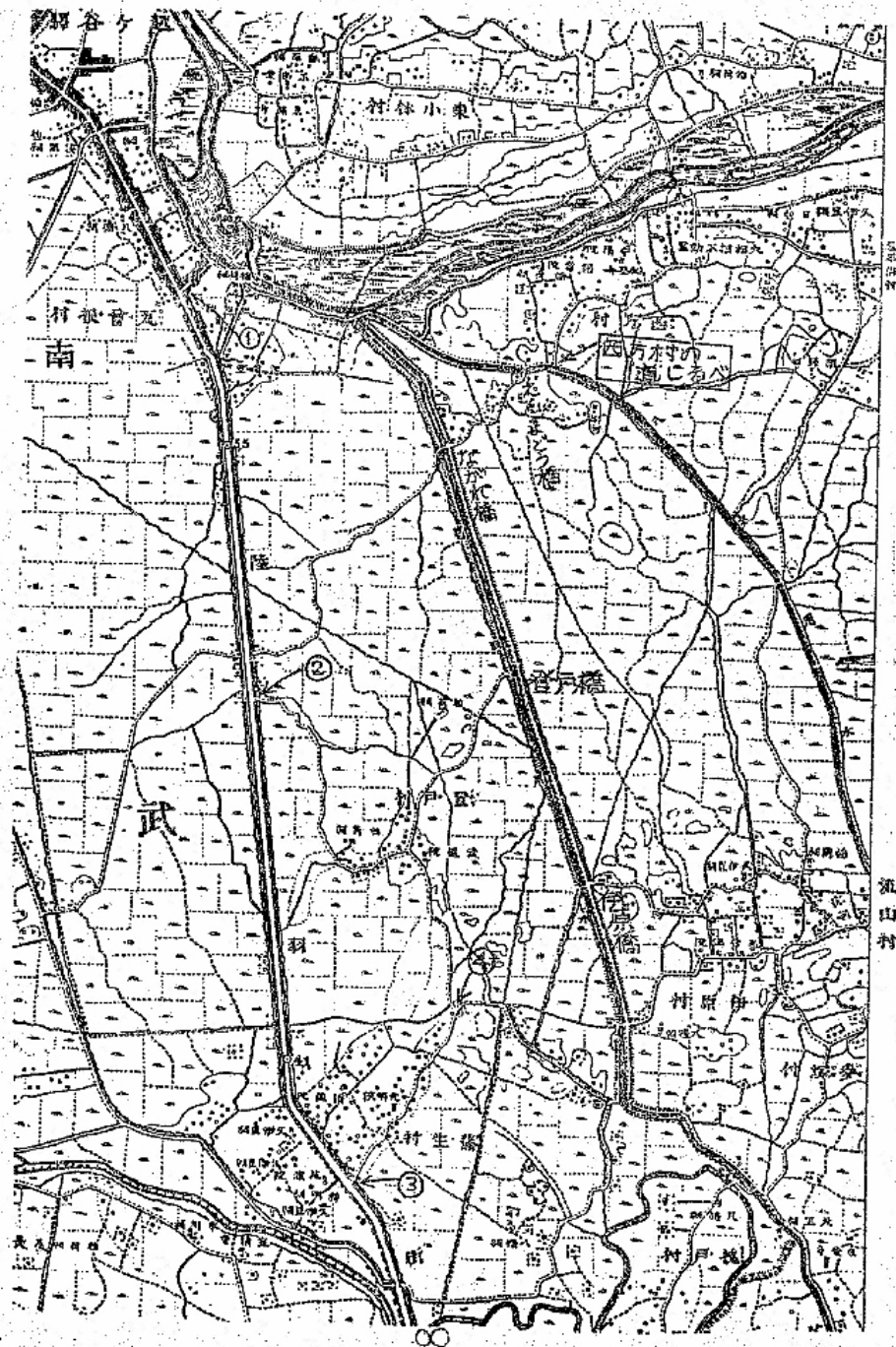
① 正面 「是より 大さかミ」(「ミ」の次に「ハ」や「不動」などの文字が刻まれているからではない)
建立日 寛保元 辛酉年 十一月(1741年)

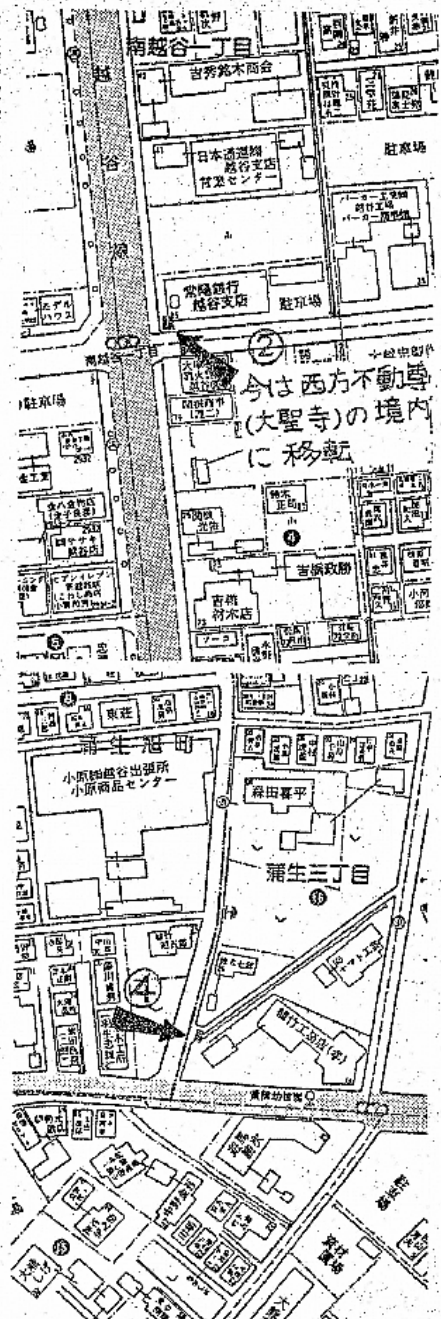
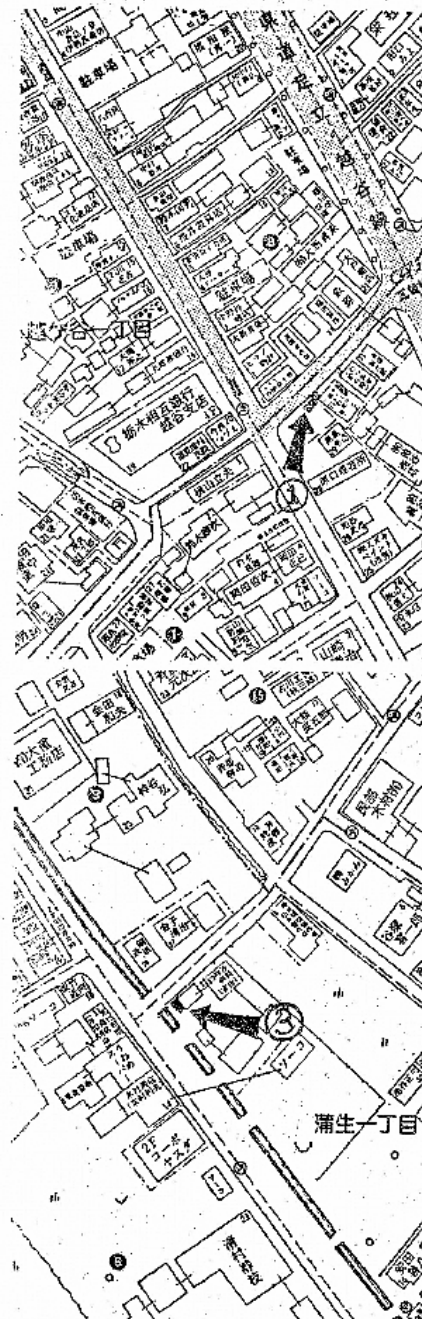
② 正面 「是より 大さかみふど図」^{ふど}より ^ふが
上部に 不動三尊の種子(梵字)が刻まれている
建立日 文久二 壬戌年 五月(1862年)

③ 正面 「是より 大さかミ通」 通=遍(ハ)
上に、不動明王像を載せる
建立日 享保十三 戊申 九月廿八日(1728年)

④ 正面 「是於 大さかミ通」
建立日 正徳三 癸己歳 正月二十八日(1713年)

なお、上記の紀年銘に続いて、「大聖寺 法印 隆園 畫図」と刻まれている。このことより明らかに「大相模不動尊」への
道案内を目的としていることがわかる。





3 日光街道の一里塚

江戸時代の各街道には、旅人の行程の目安として一里(約四km)ごとに「一里塚」が築かれていたが、その多くの一里塚には、目印としてエノキが植えられていた。

現在、都市化の進行、その他道路などの拡張などにより原形をとどめたまままで残されている一里塚は、きわめて少ない。

この一里塚は、日光旧街道に沿って流れる出羽堀の東側に位置し、高さ二m、東西五・七m、南北七・八mの長方形をなしている。塚の東辺及び南辺は土留の石垣が施され、必ずしも当時の状態とはいえないものの昔どおりの姿で残されている。また塚にはエノキ、ケヤキ、イチヨウ、松などが生い茂っている。塚の南へのびる愛宕神社の参道脇には六地藏の石仏が祀られている。

蒲生地区では古くからこの山を「一里山」と呼んでいたことや、「新編武蔵風土記稿」などに記されていることから一里塚がこの小山であるといわれていた。その後文化年間(一八〇四〜一八一八)編さんの「五街道分間延絵図」が公表され、絵図と現地との照合により一里塚であることが確認できた。絵図によれば、この一里塚は街道の東西に築かれていたものが、西側の塚は破壊され現在民家の庭になっっていることも明らかとなった。

この一里塚は、日光旧街道の一里塚として県内に残る唯一の例であり、貴重を史跡といえる。

木原徹也

4 相互扶助会の牌、順正会の旗

木村信次

越谷市役所構内に当時の厚生大臣杯護謄書
になるこの相互扶助会(相互扶助保共済の略)
の牌が建てられてゐる。この裏面の厚生省願
問商學博士清水玄選并書(たに)の牌文の中で越谷町
が国民健康保険發祥の地なりと讃えられてい
るのは相互扶助を目的として成立した越谷
谷順正会を指したものである。

その旧称の順正会は、越谷町に昭和十年
十二月^附発起人九一名、世帯人員四八九名で
設立されたが、翌年四月に医師会との妥協が
成立し、越谷谷順正会と改めた。同年十一月
国保成立の機を握る大蔵次官一行が、同会を
モデルとして視察したが、これがもとで十三
年三月国民健康保険法が成立することになつ
た。同会は同年九月一日に認可され越谷谷順
正会国民健康保険組合と称された。
昭和の初期は全国的な經濟不況が続き、自
ら滞納者が多く、昭和十年一月に組織組合を
結成し、二の滞納一掃に大なる役割を果たし

た。その後同組合は至誠会なる無盡会を設立し、こゝで得られた流動資金を利用し、困窮者の救済を目的とした医療共済を計画した。滞納の原因は大いに疾病によるためからである。これが順正会の発端である。しかし法人組織になつてゐないこと、資金が不安定なこととを理由として県よりの正式な認可は見送られた。その頃、かかる順正会の目的と方法が昭和八年から内務省を検討中の農山漁村救済方策たる国民健康保険組合の要綱案と似てゐることから内務省を知るところとなり、同省の盡力で遂に前記の如く正式な發会式が越ヶ谷敷会で行われるに至つた。この頃は、同会の成立に大きな役割をされた地元医師高橋正義博士に寄贈されたが、その後市長室に、現在越谷市立郷土資料収納館に保管されてゐる。尚、順正会という名称の由は、礼記の樂記編であつて、昭和十一年に埼玉県県事に任じられた川西実三が内務省の保険部長在任中、この名称を推奨されて決定したのである。

5 妙音寺と石川民部

鈴木 秀俊

大杉新田の新方川西側堤防から少し入った
小林松五郎氏邸内に妙音寺跡がある。

小林家は古くから、通称「妙音寺」と呼ば
れているが、廃寺になったのは、いつの頃か
わからないとのことである。

今は、石仏一基、石塔三基が残って、僅か
に昔の名残をとどめている。

（写真）右端の小石塔には、法華經一字一

石供養塔。右側面に生国伊勢国龍泉書、中
興開山。左側面に享保三戊戌歲三月、造主
龍玄とある。中央石塔は、法印祐観不生位
天明二寅年三月十八日。左端石塔は尊昌法
印不生位、明和六己丑四月二十日、右側
面に庄内領丸井村、施主大山権左主門と刻
まれている。

妙音寺について「新武蔵風土記稿」大杉村
の項に「新義真言宗葛飾郡松伏村淨極寺ノ末
本尊不動揚柳山ト号ス、開山ノ僧詳カナラズ

開基ハ葛飾郡松伏村ノ民、民部ノ祖先民部ニシテ、法名道忠法眼ト号ス、延宝四年六月廿四日死セリ、コノ道忠ハ仏法歸依ノモノニシテ、當寺ヲ初メ、スベテ廿一寺ヲ創立セリ。

石川民部ノ祖先、石川民部幸道（道善）ハ石川氏ノ末流といわれ、天正年間に武士から民間にはいり、關東に移つて松伏に居住し開墾に従事する。三代目民部幸正（法名道忠）ハ資性英敏、開墾に尽力し近郷は勿論、遠く北総民部新田、三州民部山等を開いて石高は

一万石以上、田は千町歩に余る豪農となり、開墾家として知られた。また、よく財を散じ施しを好んだという。

道忠が民部寺を建立したのは、代々仏法篤信の家を生れ深く仏法に歸依していたこと、祖先崇拜の念があつたこと、新しい村々の民衆教化善導のためといわれている。

万治三年夏、一品法親王日光社参の時、松伏静極寺に逗留されて道忠の功勞を賞し、錦の袈裟、念珠、扇子を賜った。

6 越谷の梅園

高崎 力

かつて、利根川、荒川は上流から多量の土砂を運び、越谷の地に広い自然堤防帯を形成した。砂質土壌を含む小高い自然堤防帯は果樹栽培に適しており古くから梅、桃等が栽培されていた。江戸後期になると旧荒川筋の袋山、大里、大杯、大房、古利根川筋の平方（今の川筋）大杉、大杉、北川崎、向畑、大吉、増林と対岸の藤塚、銚子口、松伏、及び江戸川筋の築比地などは、桃、梅の大生産地となり、これらの果実は毎運によって江戸へ送られていた。したがって、これら果樹の開花期には花見の名所ともなり江戸からも多くの文人墨客らが越谷を訪れている。

「徳川実紀」を編さんした成島司直は、文化十一年（一八一四）越谷を訪れた後「看花三記」を著し、江戸近郊の花見三ヶ所として杉田の梅（横濱市）、小金井の桜（小金井市）と越谷の桃をあげている。また、江戸小田向の僧侶釈敬順は文化元年（一八〇四）と同十四年に越谷を訪れて後「十方庵遊曆雜記」を著して大抵の桃林を絶賛している。さうに文人成島柳北は明治三年（一八七〇）三月、古河に赴く途次、大林、袋山一帯の桃林を見て、その著「常総遊記」の中に「都人稱するところの越谷桃源とはこれなり」と称えている。この後、養蚕業（桑）への転換もあり、桃の栽培は急速に減少し、近年では袋山、大林、大房を残すのみとなった。

一方、梅は古木になると開花しても実成りが劣ってくることか

う古木は伐採されて新木に植換えられた。明治の中頃、これら梅の古木を集めて梅花を供覧させようという発想が持ち上がり、大相模の大聖寺境内と大房の淨光寺境内に隣接してそれぞれ梅園が開設された。

真大山梅苑

通称、大相模の不動尊といわれる真大山大聖寺境内に設けられた梅園である。大聖寺は関東有数の古刹で、近郷近在はもとより江戸市にも多くの檀徒、齋中を持っていたが、明治二十八年七月（一八九五）本堂廻廊下ハウの失火で、そのもの大伽藍も惣門等一部を残して多数の堂塔は灰燼となった。明治三十五年四月新たに着任した住職高岡隆圓阿闍利は、大聖寺の再興に努力し、その一つとして境内に梅苑を開いた。これが真大山梅苑の始まりである。境内に古くからあった梅と近在から集めた古木を惣門を入った左手に移植したもので、今では梅花の全貌は想像もできないので、大正五年三月刊行の「越谷案内」をもとに推察してみよう。

梅の古木にはそれぞれ呼名が付けられていた。先づ「十善梅」だが、この老木は真大山梅苑のシンボルともいえる大木で、幹廻り一丈三尺余（約四米）、樹令およそ七百年で開花の記念樹でもある。「四恩梅」は御大典記念（大正天皇即位）として移植された記念樹で幹廻り一丈（約三米）、樹令五百年以上の古木。「千代梅」は日露戦役（明治三十七、八年）記念の梅で、明治四十二年一月建立の記念歌碑が現存し、嵯峨藤原實愛が「かぎりなき春を重ぬて匂ふらむ 八千代の梅の高きかおりは」と詠んでいる。このほか「心月梅」「将軍梅」

「加持梅」「和樂梅」「飛龍梅」「三光梅」「不老梅」「東照梅」などの名木が植えられていた。

梅の名の由来の多くは住職の布教活動(説法)に結びつくものと記念樹的名称が多かった。例えば「十善梅」であるが、これは「十善戒」であつて、悪を止める十戒として不殺生(殺さない)、不偷盗(盗まない)、不邪淫(邪淫しない)、不綺語(かざり言葉、へつらい言葉を云わない)、不妄語(妄語を言わない)、不惡口(悪口を云わない)、不瞋恚(いからない)、不邪見(邪な見方をしない)、不兩舌(両舌を使わない)、不貪欲(むさぼり欲ばらない)。善を行う十戒としては、ものの命を助ける、施しをする、清い行いをする、誠実な言葉を使う、正直な言葉を使う、やさしい言葉を使う、争いを和する言葉を使う、身は清いと思う執着をはなれる、慈悲の思いでみる、原因と助縁の道理を思いみ悟る。また「四恩梅」とは、父母の恩、衆生の恩、王の恩、三宝の恩の四つの恩を指し、三宝の恩とは仏宝、法宝、僧宝のことである。

大聖寺境内にはこれら古梅の他、古くから「大聖寺の神木」といわれていた「御座の松」があつた。樹種は赤松で昭和の中頃、ある植物学者の鑑定では「近畿地方原産のしだれ赤松」という特種と聞いたことがある。明治三十七年八月(一九〇四)建立の「御座の松の碑」によれば「この松は延暦二年(一三〇九)遷仏の時植えた」とあることからすれば樹令六百八十年の老松となる。そして「明治二十八年七月の火災に際し一葉も損しなかつたので

火除の松々ともいい……この功德を以てあまねく四恩に及ぼし、
自他俱に十善を行じ仏の誓願をしてもらなからしめんことを……と、
住職隆圓が記している。前出の「越谷案内」の記録によれば「こ
の神木は高さ一丈二尺（約四米）、幹廻り八尺（約二米四）、枝の
広がり百二十坪」と見事な松である。

境内にはこれらの他に「名譽藤」もあり、大正元年十一月十八日に
は「十善梅」「御座の松」「名譽藤」の三枚セットの写真が大正天皇
に献上した経、いづれも類稀なる名木であった。

さて、真大山梅苑の賑わいを大正三年三月九日付の埼玉新報に掲載
された記事から眺めてみよう。

三月五日 東京在住の諸中の互親講三百六十余人、午前十時世分浅
草駅発特別臨時列車に乗り十一時越谷駅着（現北越谷駅）。先頭は衆
隊、次いで浅草芸妓十四名自動車にて大聖寺へ、十一時四十分寺に着
く。午後一時より剣舞及び芸妓の手踊り、十善梅をバックに記念撮影
。同四時より本堂にて大護摩の修行、同五時帰途につく。当日雲集し
たる善男善女は約六、七千人。頗る賑ひたり。

三月六日 特別観梅会、余興に浪花節。正午より山主高岡師の法話
あり、梅花の由来、梅花と信仰等の話ありてより折詰弁当を配布。
午後三時より護摩修行、御札供物を配授して同四時三十分頃解散。

三月八日迄 観梅団基会。出席者七十余名で頗る盛会なり。

三月十日は宝徳講員八百余人の大観梅団体にて参詣。午前十一時開
張大護摩修行し、正午より同講奉納の東京尚武会の大角力あり（午後

四時同会カ士五十余名来山」とび入り自由、景品は皆同議員携帯せらるることなれば一大盛観なるべし。

以上大正期の真大山梅苑の様子をみてきたが、その後老梅も枯れるなどして少なくなり昭和三十年代には数株を残すのみとなつた。また、大聖寺の神木である御座の松も次第に活力を失ない、同年代末には枯死し、今は初代の実生が二代目を引継いでいる。

越谷古梅園

真大山梅苑と相前後して開園された観光的性格の梅園である。

大房（北越谷）一帯では桃と共に梅も古くから栽培されていたので古木も多数あった。明治三十五年三月、地元の藤井浦祐、中村代助、黒田金五郎、中村林之助、大塚孫次郎、荻野太兵衛、黒田平次郎、宇田川吉蔵氏ら八名が發起人となり、大袋村村長栗原永善、淨光寺住職黒田勇淳、大沢町小林七郎右衛門、大房黒田康蔵、同中村秋五郎、東京秋山貞助、同青藤林之助氏らの他、大房有志中が賛助会員となつて越ヶ谷古梅園の名で開園した。

梅園は淨光寺境内に続く三反歩の畑を潰して梅木を移植したので約一町歩（一町）の広さがあった。しかも、古梅園の周辺には衰家の梅林が続いていたので、あたかも、梅の郷といった風情があった。しかし、埼玉新報の明治三十五年三月から四月にかけて五号連載された江面庵富室なる人物の「探梅紀行」には、「若木はため花がろくに揃わない」と酷評されている。勿論、若木も数多く植えられたが幹廻り一米余の古木も数本はあった。

この古木の梅にはそれぞれ名称をつけられていたのは真大山梅苑と同様ではあるが、真大山梅苑は寺の梅であるから仏語等を使用してゐるのに対し、越ヶ谷古梅園では樹姿をもとに名付けているところに觀光梅園としての特徴がある。例えば「天の浮橋梅」は一幹は立ち、他の幹は横になつて瓢箪池の中央に自然の橋のようになって向側に起つていた。「雲龍梅」は枝を四方八方に延びていたし、「日の出梅」は恰も孔雀の尾を振つたような旭光に似ていた。

園内には休憩所としてのあずま屋二棟、開花期には緋毛氈を敷いた床几二十脚のほか、宇田川吉蔵氏ら三名の出店（茶店、売店）があり古梅園の写真ハカギも売られていた。

その後、古梅園は一時衰頽したが、大正三年淨光寺住職黒田勇淨師、檀徒有志の大塚孫次郎、藤井浦松、黒田平次郎、越ヶ谷駅長中島市太郎（今の北越谷駅）氏らが園の改善を計り、東武鉄道は開園中の二月十一日から三月二十日までの四十日間の乗車賃金往復切符を二割引とするほか、古梅園に対し年間二十四の肥料代を支えた。これにより開園期間中の日曜日には越ヶ谷駅（北越谷駅）から古梅園までの道には人々の行列がでる程賑わった。

文学者大町桂月が越ヶ谷古梅園を訪れたのは大正五年で「越ヶ谷の半日」なる紀行文には、「浅草駅より東武線の汽車に乗り、五十分ばかりで越ヶ谷駅（北越谷駅）に下る。平日は下等の賃金片路二十七銭なるが、梅の爲に大割引となりて、往復の賃金三十銭也。」「越ヶ谷停車場より三町（約三三〇米）で古梅園に達する。垣根が少しあるだ

けて浄光寺に接し、……田に連なり、畑に連なり梅また梅、その
冬くる所を知らず」と当時の梅の郷の様子を形容している。

大正七年（一九一八）には、病虫害の発生が多くなり梅花は年
年少くなり、加えて園の維持管理などの問題も生じたので、株
式設立による越谷古梅園は同年三月に解散し、古梅園は浄光寺
が引継ぐことになった。浄光寺は園の改修を進め、大正十二年七
月には瓢箪池及び築山を千円余の大金をかけて大改修した。

昭和十六年、十七年には東武鉄道が主催して、東京在住の俳人
、画家、マンガ家、小説家などを招待して園遊会が開かれ、その
時訪れた高浜虚子は、寒けれど、あの人むれも、梅見客りと
詠んでいる。この頃東遷した名士には前田雀郎、岡安迷子、長谷
川かな女らがあり、また宮内庁越谷御獵場を訪れた皇族方も立寄
っている。

太平洋戦争で寂れていた古梅園が復活したのは昭和二十六年か
らである。この頃浄光寺では近在から梅の古木を集めて移植し、
また、開花期に合わせて光頭大会を開催した。別名ハゲ大会とも
いわれ、埼玉新聞社、地方選出国會議員、埼玉県知事ら多数の名
士の後援で、東武地区を中心に県下各地からハゲ自慢の人達が集
合して光頭を競った。光頭は審査によって等級がつけられ、賞品
も光にちなんだヤカン、カナダライ、ハエタタキ、洗面器、コッ
プ、鏡、電球などユニークな品ばかりだったので授賞式では爆笑
に包まれた。光頭大会は例年開催されるようになったので、浄光

寺境内は整備され、昭和二十八年八月には表参道に御影敷石を敷くなど景観は一層改善された。そして、昭和二十九年の光頭大会には女優三名を迎えて光頭大撮影会も同時開催され、この時の記録映画は遠くブラジルにおいて上映されている。

昭和三十一年になると、北越谷区画整理事業が着手され、同五月には地下鉄日比谷線が武州大沢駅に乗り入れることになり、駅名を北越谷駅と改名された。これ以後、淨光寺古梅園を含む農村環境は急速に市街化に向けて大きく変動していった。現在では古梅園当時を偲ぼせる古木は数少なくなったが、淨光寺の努力で境内は美しい庭園となり、梅の木も数多くなり、梅花期には多数の梅見客が訪れて賑わいを収め、梅の名所として知られるようになった。

明治三十五年頃、梅の古木を集めて観覧に供しようとした先人の発想は素晴らしい。現在でも北越谷、大塚、袋山を始め越谷市内にはまだ多くの相当数の梅の古木があるが、やがて開発が進むにつれて代採される運命にある。関東にふける梅の名所は、小田原の曾我梅林、埼玉の越生梅林、群馬の秋間梅林、水戸の偕楽園梅林等がよく知られており、愛った栽培方法では滋賀県長浜市の「盆梅」が全国的に有名である。盆梅とは、梅の古木の鉢植えである。わが越谷は、かつて東京近郊の桃や梅の名所であった。明治期の先人にならって梅の古木を集め、同じ名所「越谷の梅」を復活して後世に伝えられたい梅にとつて幸いであろう。

7 大絵馬、能谷直美奉願圖

谷岡 隆夫

この彩色の大絵馬は櫻井大泊の大龍山安国寺管下の観音堂に掲げられて居り、同寺の米福寿院慈眼寺境内にある。絵馬とは神仏に祈願奉謝のため、板絵を描いて奉納した額であつて、平家時代に始まり、鎌倉時代に一般化したのである。絵馬には小絵馬と大絵馬があり、後者の場合、東国殊に武蔵国に於ては武將が輩出してゐる。武將の絵馬が多いのである。

この能谷直美奉願圖もその一つであるが、新編武蔵風土記稿によれば、安国寺は能谷直美運生坊の堂んだ茅庵で、立像の本尊阿彌陀如来は、運生坊の守仏であつた。

直美は寿永三年（一一八四年）

西

海に走つた平家を追つて一の谷の平家屋敷に一番乗りして高名を立てた。この時願慶禪で平教盛を廟と奉じて時辰し討ちとつたが、その首に遺品と書状を添えて教盛の父経盛の

もとへ送り、嵯盛は熊谷狀に對し感謝の返狀
を送った。建久元年（一一九〇）嵯盛の菩提を
葬ったため、同忌に紀州高野山に熊谷寺を建立
し、山内に供養塔を建てた。

その後頼朝が、冷遇され不満であったが、
建久三年に久下直光と、地境、第いの裁決が、
頼朝の前で行われた際、生来の口下平から折
弁できず、証拠の文書を授け捨て自ら髪を切
り、翌年上洛して法然上人の門に入り、蓮生
坊と名乗った。

8

砂利道伏巻塔

五街道の一つ奥州街道が蒲生地内を縦断して、天正年間に陸羽街道を通じて奥州へ行くように命令され、不運にもこの地に落着かざるを得なかつたといふような文獻が残つてゐる。それからみても、戦国時代以前からのものであることが想像される。従つて最初うしろを陸羽街道と弥し、その後江戸時代になつてから奥州街道と云われるようになった。また戦国時代以前であらうか。

千代から花畑・八條・吉川を通り越谷を通り抜けたとも云われる。このような話が伝へられてゐることは、江戸時代になつてからと思ふ。その後、街道を順次と、うえてきたのであらう。更に蒲生一丁目旧道に面した傍に、二百三十年前に道路工事を行つたという記録が石碑となつて残されてゐる。詳しくは砂利道伏巻と記され、高さ二百五十cm、幅五十cm、厚さ五十cmである。年号が、千時寶

曆七丁丑歲寅大吉辰、左右に次の人名が刻ま
 れてある。常州又泉村神山藤兵衛、野州田野
 村添谷源左衛門、下總国古河町高橋喜兵次、
 江戸芝南郡八十次、江戸八丁堀新井七兵衛、
 尾曾根村中村彦左衛門、武州埼玉郡八条領蒲
 生村・大願主大熊仁兵衛、願主法師康成・助
 人法師資隆、同鈴木新左衛門、同伴野茂七、
 蒲生村中、もう一ヶ所蒲生公民館の所にも
 争塔が立っている。從此橋北通長三百間之場
 所常州茨城郡神山藤秀、横面には、此内拾間

之場所野州茅賀郡添谷長俊寄付とある。年号
 は見えなが、この水うは宝暦七年に大規模な
 道路工事が行なわれた時に建立されたもので
 あろう。鰲か蛙のような形、塔を近所の人は
 おがまさま、きょうだ、さま、行者さまと
 いう呼び方をしており、胴にはワラジなと
 あげられ、足の瓶気をなかし、安全に砂利道
 を踏んで行けることを念ずるもので、村人及
 び旅人の安全保証の念願をこめて建てられた
 ものである。日置宗一

9 越谷市を中心に分布する

山王二十一仏板碑について

星野昌治

山王二十一仏板碑とは、二一箇の種子いじ（梵字）を刻んだ板碑で、これは比叡山の日吉大社に奉祀する「上七社」「中七社」「下七社」の山王二十一社の本地仏種子を表していると考え、現在、全国で四六基（そのうち越谷市八基）確認されている。

その分布をみると、北限は茨城県猿島郡三和町、南限は東京都文京区、西限は埼玉県大宮市、東限は千葉県我孫子市といった、一都三県が隣接する埼玉県東南部、つまり越谷市を中心にした地域に分布している。

山王二十一仏板碑の最古の遺品は、川口市西新井宿宝蔵寺の永正十五年（一五一八）の造立のもので「奉庚申待供養」とあり七郎太郎ほかの交名きょうなが刻まれている。また、最新のものは、八潮市小作田長安寺の天正二十年（一五九二）のもので、山王二十一仏板碑の造

立期間は七四年間となる。

ところで、山王二十一仏板碑のほとんどには、庚申待供養、または申待供養の造立趣旨銘が刻まれている。これは庚申信仰と山王信仰が習合したことを表したものである。

さて、ここに紹介する二基の山王二十一仏板碑は数少ない完全な形として現存する中の貴重な遺品である。

(1)は、越谷市増森薬師堂のもので、上部に日月、天蓋を刻み、瓔珞の下の両側に申待／

供養とある。紀年銘は種子の間にあり、天正三年乙亥／八月吉日とある。さらに下には前机、三具足があり、その両側には兵庫、三衛三郎外十数名の交名が刻まれている。

(2)は、越谷市千足東養寺のもので、上部二条線の下に日月、天蓋があり、その両側に申待／供養とある。紀年銘は、種子の間、中央一行で、天正三年乙亥十二月吉日とある。下部には、前机、三具足があり、その両側に神三郎、彦次郎、善三郎、集人助、政之丞、兵

庫、彦左衛門、彦右衛門、新左衛門、孫八、新三郎、八郎三郎の十三名の交名が刻まれている。

10A

建長板碑

丸田富夫

板碑は死者の菩提を営むため、あるいは造立者自身が生前に、死後の冥福を祈るために建てられたものである。

関東地方では「紋父青石」とよばれる緑泥片岩を使っているが、この名称は昭和三十六年に県教育委員会が新たに文化財指定のとき用いられた。その後この名が使われている。

分布はほぼ全国的であるが、適当な石材が容易に入手できる関東上^{関東}地方が圧倒的に多く、そのうち旧武蔵国（埼玉・東京）および神奈川県の一部に特に埼玉・東京・神奈川・千葉の約二百万点と遺品が集中している。

造立された時代は戦乱が続く鎌倉時代の初期から室町・戦国時代に至る約四百年間であり、江戸時代に入ると急に遺品がなくなる。

この板石塔婆は市内御殿町の元荒川堤防上にあるもので、その建立は鎌倉時代中期の建長元年（西暦一二四九）で、越谷市内に現存する最古・最大の板石塔婆である。

所在地

越谷市御殿町四四五〇、四の路

俣

高さ

一四五センチメートル

上幅

五〇センチメートル

下幅

五四センチメートル

厚さ

五センチメートル

中央に大きく阿弥陀如來の種子キリークを
雄大に篆刻彫りで彫り込み、その下は建長元
年己（つちのととり）が見える。

下半部は折損して残っていないが、とは

三メートルほどの雄大なものと推定され、願
主・願文等が不明であるのが惜まれる。

連絡先 TEL 03 (969) 三四四一

Ⅱ 恩間の馬頭観世音

三浦 実

「馬頭観世音は観世音菩薩の化身で、普通は頭上に馬頭をのせたお姿をしており、いろいろの悩みをたち切る功德があるとされており、後世馬の病氣と安全を祈願したり、路傍に祭って道祖神のように信仰されております。この写真は越谷市恩間^{おんま}七三〇番地先の路傍の目立たない一隅に、ひっそりと建っており、道しるべを兼ねた馬頭観世音です。この

石仏の大きさは高さが一メートル弱で、寛政九年（西暦一七九七年）岩附領恩間村、大悲馬頭観世音」と記してあり、昔から地元の人々の信仰が厚かったものらしく、今でもお供物やさい銭が絶えないのです。寛政から現在までの永い間、悪童のいたずらによる破損とか、道路拡張、区画整理による移動、紛失などにも遭わなかった事は僥倖とでも言うべきではないでしょうか。この石仏を後世に残すためには保護の目で見守る必要があるものと思われれます。

13

道標

交通案内板

山田政信

現在社寺の門前や路傍に残つてゐる石造物に道標がある。これには道案内を主体としたものと、他の目的で立てた石仏、石塔類に道案内の銘文を併記したものとがある。

道標は人々を目的地に案内するためのものであるから、それに関した銘文だけを彫つた素朴なものこそ純粹の意味であり、道しるべといえよう。のちに庶民の旅行が信仰を背景と

しながらも一般化してくるに従つて造立者名や建立年が銘文に加えられるようになったのは江戸初期からと思はれる。

道標がある特定の目的地とか、交通路の方向、行程を示す銘文を持つ石造物であることは、いうまでもないが、この方向、行程の表わし方はきわめて多彩である。それが地名を対象とした場合、その立てられてゐる土地からの交流圏及住民の旅行指向、土地の交通路としての環境等が推測することかでき、またその

対象に民間信仰を含め、宗教的色彩の濃いものも多く、同一の宗派に限らず、地理的に近い附近の社寺を示していることは、当時の有名な社寺は観光ルート上のポイントになっていた。そのほか、それらを訪れる人々の案内を目的としたものもある。

写真の道標は天嶽寺入口にあるもので、現在では砂地の地に建立されていたか不明であるが、建立銘によると萩島村会田秀蔵の願により猿田彦大神の主尊塔に草加・越谷等の方向

を表わしている。

右側面 萩島村

東草加参り

会田秀蔵

願主

まくり

かすかべ

正面

猿田彦大神

南にーがや

北のしま

いわつき

左側面

干時文化四丁 卯歳六月大吉日

市指定有形文化財 工芸品

野島山淨山寺は貞観二年（八六〇年）滋覺大師の創建にて子授、安座、子育ての御靈驗あらたかであるという。もと天台宗に属し滋福寺と称した。徳川家康が越谷周辺で鷹狩を催したとき、当寺に参詣し寺領三石が寄進された。このとき、朱印状がいわゆる鼻紙朱印状である。安永七年（一七七八）江戸越島天神神楽殿にて出開帳を催したところ、多くの参詣者を集まり、その後江戸をはじめ関東各地に出開帳を開いたので、信者は関東一円に広がっていった。天明五年（一七八五）には越島天神を江戸の出張所と定めている。

この大銅口は銅製で天保十二年（一八四一）に奉納されたもので、神田紺屋町、本小田原町、日本橋青物町、神田盤島町、馬喰町二丁目、江戸越島四日市、芝金杉浜町、大伝馬町、沼川冬木町、千住河原町、二郷半領花和田村、竹塚栗原村、粕壁、高野、大門、高崎など広範な地域にわたる奉納者の名前が八〇名ほど

刻まれており、信者が広範囲に広がっていたことがわかる。

この鐸口は厚さ二尺（六〇センチ）直径六尺（一七六センチ）重量二〇〇貫（七五〇キロ）という全国でも稀に見る大きさである。この鐸口も戦時中軍需資材として徵発されることになっていたが、天井と釣環との間隔が狭かったため取り外すことができず、徵発が免れたものである。

なおこの寺には歴代將軍の寺領寄進状をはじめ淨山寺由緒書、出閣帳の人馬寄進帳、その他数々の古文書が保存されている。